

論文審査の結果の要旨

氏名：呂 惠眞

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：薬猟考を巡る日本食肉文化の歴史的考察と現代の
と畜場における食肉部位の活用・廃棄に関する実証研究

審査委員：(主 査) 教授 石田 正美

(副 査) 教授 川手 督也

教授 清水みゆき

特任教授 小泉 聖一

本学位論文の審査は、提出論文の内容、口頭発表、および口頭試問の質疑応答に基づき、上記の4名の審査員によって行われた。

学位論文は、中華圏から留学してきた申請者が、中華・朝鮮料理では「血」の一滴も余すことなく利用しているのに対し、日本の庶民的な食文化では内臓肉と動物の血液をあまり食さない伝統があると感じ、「なぜ内臓肉をわずか一部しか食べないのか、いつ頃から食べなくなったのか…」との研究上の問いに答える目的で、研究が行われた。本論文は第Ⅰ部の歴史編と、第Ⅱ部の実証研究編から構成され、第Ⅰ部の歴史編において、日本の食肉文化の歴史を紐解く一方、第Ⅱ部実証分析編においては、食肉習慣の現状を把握するため、畜産副生物のうち、どの部位を活用し、廃棄しているのかと畜場に対するアンケート調査を実施した。

第Ⅰ部歴史編においては、675年の「肉食禁止令の詔」以前においては、食肉さらには「血」を忌避する文化は存在しなかったが、同禁止令以降、それまで日本において育まれてきた古代神道思想と結びつくことで、人のみならず動物の死や血に対する「穢れ」の観念が形成され、平安時代の『弘仁式』や『延喜式』で制度化されるなかで、庶民の間にも食肉忌避と「血」に対する「穢れ」の観念が形成された。他方、中国から朝鮮を通じて入ってきた「本草学」も肉食禁止令の下では、植物を主体とした日本的な和漢本草学へとなっていった。しかしながら、武家社会に入ると、武具のための皮革を確保する必要性から、皮革職人の長吏頭には大きな権限が与えられ、皮革とともに動物の食肉と薬種が、藩主などに渡る流通ルートが確立された。このため、限定的ではあるが、獣肉の食用を「薬食」と別名で呼ぶようにして、動物臓器を含む肉の隠れ食いが行われていたとの史料が残されている。他方、沖縄においては、中山国として中国、朝鮮、東南アジアと大航海時代から、獣肉並びに獣肉の血液を食さない食肉禁止の文化の影響を受けてはいなかった。明治時代に入ると、肉食禁止令が廃止され、食肉需要の盛衰を経ながら、昭和の高度成長の時代に食肉需要は大きく拡大した。しかしながら、その中心は精肉であり、内臓肉の多くは廃棄されてきた。ただ、明治期においては貧困層も上流階級の間でも内臓肉を食していたことが記録されており、少なくとも太平洋戦争期までは内臓肉も食肉の対象から外されてはいなかった。しかしながら、食肉可食部位と非可食部位の指定の歴史をみると、1941年において可食部位に指定されていた内臓部位が1979年以降指定から外されていること、2003年時点でO157並びにBSE問題の影響を受けたためか、牛の特別危険部位と豚の臓器が非可食

部位に指定されたことが明らかになり、日本の本草学が和本草となったことに加え、可食部位と非可食部位の指定の変化が影響し、戦後内臓部位を食さないようになったのではないかと思われる。しかしながら、1980年代から焼肉ブームが起こり、タン（舌）、レバー（肝臓）などが食されるようになってきている。

第Ⅱ部実証分析編に関しては、2015～2016年と2020～2021年に全国のと畜場に対し、豚と牛の副生物を活用しているか廃棄しているのかについてのアンケート調査を実施したところ、(1) 2015年と比べ、2020年の活用率が高い、(2)牛よりも豚の活用率が高い、(3)脳、脊髄、耳介、外鼻、頭蓋に関して、豚と比べると牛の活用率が低い、(4)血液、陰茎、精巣、胆嚢、胆汁の活用率は50%未満と、豚と牛ともに低い、(5)と畜場が存在する都道府県に関しては、政令指定都市を擁する道府県と沖縄での活用率が高い、傾向が示された。そのうえで、こうした(1)～(5)の傾向を2項ロジットモデルを用いることで、統計的有意性が検証された。その結果、(1)と(2)の傾向は統計的に有意と判定された。(3)については、脳、脊髄についてはすべてのケースで廃棄されている状況が統計的に有意と判定され、BSEの影響が示唆される結果が示された。なお、さらに各部位×豚/牛のダミー変数の交差項を取ることで、耳介では豚に限定すると活用を示唆する結果が示される一方、牛に限定すると廃棄を示唆する結果が統計的有意性をもって示された。(4)については、血液、陰茎、精巣、胆嚢、胆汁、副腎、胎盤が廃棄されている状況が統計的に有意と判定され、血液については穢れの観念が歴史的に強かったこと、その他の副生物に関しては、戦後それらの部位で可食部位の指定が外されたこと、さらには日本の本草学が和本草となったことが影響したものと思われる。(5)に関しては、と畜場ダミー変数の代わりに都市人口比に自然対数を取った説明変数も統計的に有意と判定され、大都市では副生物の受け皿となる焼肉店などが多いことを示唆する結果が示される一方、食肉禁止の影響を受けなかった沖縄での活用率が高いことが実証された。

よって本論文は博士（生物資源科学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 6 年 2 月 15 日